

AJU 愛光園だより

～私たちは、誰もが人間としての尊厳が保たれ、安心して共に生きる社会をめざします～



編集者：社会福祉法人 愛光園
本部事務局 愛知県知多郡東浦町緒川東米田3番3
TEL 0562-83-9835 FAX 0562-83-4344
URL <http://www.aikouen.jp/> E-mail honbu@aikouen.jp

第121号

「じゅうがあるで なかまがおるで わたしの家だよ」

障がい者福祉支援事業部 部長 渡部 等

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ致します。

昨年夏、発覚した「消えた高齢者」事件は現代の日本社会の暗部が明らかになったようで、障がい福祉支援事業部が進めている「地域生活支援の充実」において「地域」が抱える課題としてとらえる必要があると強く感じます。

それを予見していたかのようにNHKでは「無縁社会」シリーズを放映していました。都会の片隅で発見される無縁死は年間3万2千人を数えます。

「無縁社会」はかつて日本社会を紡いできた「地縁」「血縁」といった地域や家族・親類との絆を失っていったのに加え、終身雇用が壊れ、会社との絆であった「社縁」までが失われたことによって生み出されていたと伝えていました。何よりも大切な「いのち」が軽んじられている私たちの国、そして社会のあり方を問い直されました。

このときに鮮明に思い出すのは1年前に癌で亡くなった戸田ホームの清水洋子さんのことです。清水さんが生きた「地域」は、この「無縁社会」とは大きく違っていました。先日まとめられた「戸田ホーム18年の歩み」には、多くの方からの感謝やねぎらいのメッセージが綴られていました。亡くなる前日にヘルパーの人に笑顔で言った「ありがとうね」の言葉が心に染みてきます。清水洋子さんは人と人がふれあうことができる町で最期を迎えたのでした。

新潟市にあるコミュニティ・カフェの聖地と言

われる「うちの実家」は「地域の茶の間」として、子どもからお年寄りまで、障がいの有無を問わず、誰でも好きな時に立ち寄って好きなことをし、誰が来ても「あの人、だれ？」という目で見ない、エプロンは台所以外ではしない、といった決まりごとの下、「お世話する人・される人」という関係をなくし、誰もが生涯現役でいられることを理念に掲げています。代表の河田珪子さんは「現在、地域で一番足りなくなっているのは、隣近所同士の絆だと思うんです。今、公的な制度やインフォーマルな仕組みと組み合わせてもまだ足りなくて、隣近所同士で何かあったときに『ちょっと助けに来て』って言えるような関係性を再構築していく時期に入っているのです、『うちの実家』もそれをやり始めているんです。昔のようにベタベタした関係、プライバシーを侵すような関係ではない隣近所との関係性を地域に作っていく、この地域で生きて死にたいって思える町づくりをする時代に入ってきていると思います。」と提言しています。

「じゅうがあるで なかまがおるで わたしの家だよ」は戸田ホームから発信されたメッセージです。障がいのある人たちがグループホームなどで町で暮らし地域の一員になることが、地域の仲間作りのひとつの核となるように展開していきたいと心新たにしました。



『平成23年度愛光園誕生の地で、 就労移行支援事業を新たに立ち上げます』

ひかりのさとファーム 就労支援員 田中幸弘

ひかりのさとファームは平成20年4月より障害者自立支援法にある就労移行支援事業・生活介護事業を開始しました。平成22年4月から就労継続支援事業B型も行っています。

就労移行支援事業は働く意欲と能力のある障がい者がもっと企業や会社等で働けるようにと、支援を「就職」という目的に特化しています。もともとひかりのさとファームは障がいのある方が働く事を考えてスタートした施設ですが、同じ「働く」といっても、それぞれの事業によって、その対象者や目的の違いがハッキリしてきました。

就労移行支援事業では、一般就労を希望された方に対し、必要な知識及び能力の向上のために作業や実習を実施し、適性にあった職場を探し、就労後の職場定着の支援を行っています。そして事業開始後、2年半で延べ20名が利用され、9名(11月30日現在)が就職に結びついています。

法人として来年度、もっと有効にこの就労移行支援事業を推進していける様、次の内容で事業を展開していくことになりました。

1. ひかりのさとファームの就労移行支援事業(定員10名)を廃止し、新たに就労移行支援事業所「障がい者就職サポートセンター(仮称)定員20名」を開始します。

同一敷地内で他事業の利用者と同じ作業を行っ

ていることは、就労移行事業利用者にとって一般就職への意識を高めることに難しい面がありました。(逆に他事業サービス利用者も混乱される場面もありました。)

2. 現在より利便性の高い立地へ移転します。法人の原点である愛光園の跡地(大府市共和町)を有効活用して、新事業所を建てることになりました。公共機関からのア



就労先での様子

クセスはよくなり、今までより広域からの利用者が想定できるとともに、実習先や求職先の選択肢も広がると考えています。

3. 働きたいと願う障がい者にとって有効な地域の社会資源の一つを目指します。

まだまだ未熟ではありますが、スタッフの就労支援技術を磨き、さまざまな障がい特性に合わせた支援を行います。



実習先での清掃作業風景

就労移行支援事業はその役割(就職に繋げること)が明らかですが、2年間の利用期間があり、就職へ送り出した後は定員を満たすよう運営を続けていかねばならない命題も持っています。知多北部3市2町においては、廃止や廃止の検討をしている事業所が増えており、現在実働するのはひかりのさとファームを含め4事業所だけとなっています。

われわれの目指す就労移行支援事業は、障がいを有していても、その人の力でその人らしく働き続けられる事を支援していく事です。そして希望され、就職したその人の働きを通して、周りの人々も学ぶ中で、会社も社会も共に成長していく事に繋がれたらと願います。この事業は地域の中で共に生きることを目指す法人の大切な実践のひとつです。これからも行政や他の関係機関とも連携しながら、「働きたい」という願いを叶えられるよう支援していきます。どうぞ多くの方のご理解とお力添えを頂けますようお願い致します。

『楽しい時間作ります』

高齢者在宅支援グループ
副グループ長 山本茂男

私が高齢者の通所サービスに関わるようになって、8年になります。地域の高齢者が、通所サービスに何を求めているのか？というところは様々あると思いますが、なにより自宅を飛び出し、いろいろな人と交流し、楽しみを持つことが出来るというのが、ひとつの魅力ではないかと思っています。この8年の中で、私が通所サービスの中で

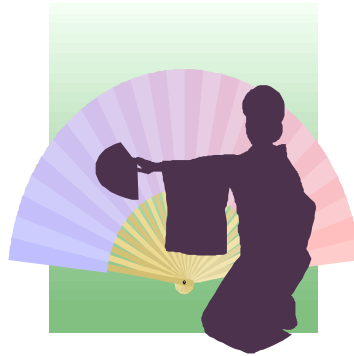


担当する役割もいろいろと変わっていましたが、いつも根底にあったのは、ご利用者に「こぶしに通って楽しかった」と感じてもらいたいということでした。

その為にいろいろなレクリエーション・催し物を企画・実施してきました。中でも好評だったのが、ちょっとしたコスプレをした企画でした。

これは私が勝手に思っているに過ぎないことですが、この近辺のデイサービスで、サンタクロースの格好で送迎に出かけたのは私が最初です。ご高齢の方々にとっては、洋風の催し物、新しい流行り物のようなものは、なじみにくいということも多いのですが、クリスマス・サンタクロースなどはずいぶん日本にもなじんでいるものですし、例えばお孫さんなどにクリスマスプレゼントを・・・などということをされる方も多いでしょう。いつもの職員がサンタクロースでお迎えに来た。ちょっとしたことに過ぎないのですが、季節感をたっぷり感じていただけました。

節分には鬼が必要です。人生の粋を経験されているご高齢の方に遊びは通用しません。どうせやるのであれば、まさに全力で体を張って行うのが私のポリシーです。全身を水性絵の具で真っ赤に塗



りつぶして、肉体コスチュームで鬼を演じります。今の時代、正直なところ、ちょっとお金を出せば、気軽に赤鬼に変身できる衣装なども買うことはできます。そこまでやる必要はないのかもしれませんが、そこは

やはりリアリティーの追求。赤い布を身につけると、地肌が赤いのではインパクトが違います。ご利用者の反応もまさに目を見張るような表情を見せてくださいます。刺激が強ければ反応も鋭い。いつもは比較的粛々とされている方が、人が変わったように無邪気に豆を投げてくださいることもありました。

八十八夜には、昔ながらの着物に身を包んだ茶摘娘？が新茶を届けます。ホントはおっさんでも格好が娘ならそれでいいんです。ご高齢の方はみなさん優しいですから、「ちょっとそこのかわいいお姉さん、お茶頂戴」と声をかけてくださいます。もちろんすね毛などもない、きれいな足でお茶を運びます。とある方に茶摘娘？が新茶をとどけると、まさに感激した表情で「まあ、きれいな、着物～」と見事な切り返しをしてくださったことが忘れられません。内容そのものは「新茶を飲んでいただく」という非常にシンプルなものですが、ちょっとした色添え？で楽しい雰囲気が増します。

いずれにしても、企画を通して、ご利用者の生き活きとした表情を見ることが出来るのが、私にとっての最大の幸せです。一度いい笑顔を見てしまうと、まさにやみつき。気づけば自分の中でも定例の行事になってしまいました。いろいろな役割や業務を担当する中で、どうしても時間が作れずできなかったこともあります。そんな時にご利用者から「今年は来てくれなかったのね」などと言われると、期待を裏切ってしまった申し訳なさの反面、楽しみにして下さっていたことを非常にうれしく感じます。

私の野望はひと月ひとつの12ヶ月・12コスプレ。それにはまだまだ足りませんが、そこはこれから。

さあ、楽しい時間を作りますよ。

『拡がり続ける地域での暮らし』

地域生活支援グループ グループ長 多田 真

現在、社会福祉法人愛光園には、1ヶ所の福祉ホームと15ヶ所のグループホーム・ケアホームがあります。所在地域は、東浦町7ヶ所、阿久比町2ヶ所、東海市1ヶ所（以上は愛光園地域居住サポートセンター管轄）、大府市5ヶ所（愛光園グループホーム・ケアホームセンター管轄）と知多北部の2市2町に亘ります。ホームはそれぞれ2～6名の定員で、平成22年末現在、全体で63名の方が暮らしてみえます。

平成4年に1軒目のグループホーム『戸田ホーム』がスタートしてから、18年余りの歳月が経過しましたが、一法人が運営するホームの数がここまで拡がりをみせているのは全国的にも稀で、『知多地域は障がい者地域生活の先進地域』として、現在も県内県外を問わず多くの方が見学に訪れます。

しかしながら、長く地域で暮らし続ける、それを支えていく実践が、とても他のお手本になるようなものとなっているとは言い切れないのが現状です。それでも受け入れを続けているのは、日々の試行錯誤をありのままに伝えていく事が、共に悩みつつも暮らしを支え続けていく人々の輪を拡げていくことに繋がっていくのだと考えているからです。一人ひとりの暮らしは、絵にも描けない美しいものとはいえませんが、深くうなずける物語を、それぞれの方がその人らしい生き方の中で綴ってみえます。それを大切にしたい、そっと支え続けて行きたいと思います。

さて、それでは法人の障がい者地域居住の場が実際にどんな課題を抱えているのでしょうか。ここにそれを2つ挙げるならば、1つ目は、そこを支えていく人材の確保と育成です。ホームは、住居と食事を提供するだけの場ではありません。一日の疲れを癒す安らぎの場であり、明日への英気を養う場です。仲間と肩を寄せて暮らしを営んでいくには、程よい関係性を保つ巧みなサポートが必要な事もあります。悩みを聞く耳、変化を的確に捉える目も大切です。そうした支援力を備えた人材が地域で育つことが、安心して豊かに暮らすことの

必須条件となります。幸いなことに、この地域には協力を惜しまないNPO法人等の力強い支えと、法人内では高齢・障がいの事業部を越えた協力体制も築かれようとしている現状があり、今後の展開に光明を与えています。

2つ目には、居住環境の整備が挙げられます。ホームの中には、築30年を越える建物も複数あり、耐震上の問題や、居住者の高齢化によりバリアフリー構造住居への住み替えが必要なケースも出てきました。長年培ってきた地域との繋がりを重視しながらも、安心・安全・安楽に暮らせる場の提供に向けて、英断が急がれています（なお、来年度以降とはなりますが、ホーム居住者への家賃補助が国から出るという朗報も入ってきています）。

地域での暮らしは、決して平坦なものではなく、問題は山積しています。しかし、自分の暮らし・居場所を築こうと日頃は淡々と、時に懸命に奮闘しているホームの仲間たちの姿は、正に人としてあたりまえの暮らしのにおいがして、近くでそれを支援する者たちに生きることを本質を語ってくれているように思います。

みなさん、今年も悠々と生きていきましょうね。ところで、平成23年度から2つのホームが仲間入りする予定で現在検討を進めています。こちらのみなさんもよろしくお祈りします。



旧愛光園跡地（大府市）に建築中のケアホーム

『新たな地で、仲間たちの魅力のひろがり』

日中活動支援グループ グループ長 松澤 賢治

愛光園が誕生した大府市共和町から移転してきて、早2年と7カ月が過ぎました。今この時季の旧愛光園跡地では、玄関を一步出ると伊吹下ろしが「ビューン」、上着を着ていても全身ブルブル。園内も床暖がなかったの、下から深々、エアコンを入れても部屋が暖まるのに時間がかかっていました。しかし、新しい愛光園に変わり、玄関が南向きのため北風も遮られ、また室内に床暖房も入り、暖まり方の速さが変わりました。快適さを感じています。その快適さの中で様々な活動を行い、其々の空間で仲間たちの笑顔が溢れています。

愛光園が大府市共和町にあった時代から、スタッフが知っている仲間たちの素晴らしいところ、持っている大きな力を自分たちの中だけで留めてはいけない、それを地域の方たちに知って頂きたい、という思いから地域に向けた活動の展開に取り組んできました。これはどこに行っても変わってはいけないことだと思っています。

そして、平成20年の5月にこの東浦の土地に移転してきました。今までの繋がりを大切にしながら、新しい土地での人の輪作りとして、園内で行う交流会や教室開催、公共施設を利用した園外活動等、地域に向けた活動を少しずつ展開してきています。

演劇活動を中心に行っているグループでは、町内にある生路児童館で2回の公演を行いました。お客さんは親子クラブで参加している親子です。

その親子10数組の前で、「芋レンジャー」という劇の内容を披露しました。その他、革細工を中心に行っているグループでは、参加の募集を東浦広報誌に載せ、園内で革教室を開催したり、また平成22年の秋に初のチャレンジで、町内にある緒川小学校に革細工を教えに行く機会がありました。グループメンバーの代表2名が講師となって、小学生80名という大勢の前で作り方をレクチャーしました。もう一つ、リサイクル活動を中心に行っているグループがあります。大府の時代に缶回収を行っていましたが、移転当初は相生の丘の住宅がまばらだったので、この活動が滞っていました。しかし、2年の間に住宅が立ち並び、回収先を相生の丘にシフトチェンジ。今では、毎週徒歩で、一軒一軒のお家を回って缶回収を行っています。

紹介させていただいたのはごく一部です。その他、様々なグループ活動があり、各々特徴的な活動に取り組んでいます。

仲間たち一人ひとりが様々な活動の中で、個性を發揮し、色々な人と結びついていながら一人ひとりが輝いていく。その人がその人でしかできない働きをし、その人らしく生きていく。この事が一番大切だと思っています。

これからも仲間たち一人ひとりを大切に、個性溢れる生活が送れるような取り組みを考え続けていきたいと思っています。



革細工教室の様子(愛光園会議室にて)



空き缶回収(相生の丘にて)

一步前へ、相談支援の願い

— 連携と地域自立支援協議会 —

相談支援グループ グループ長 葛間雅由



年頭にあたり、私たち相談支援グループが障がい者支援のために一番大事にしたい「連携」について考えました。

相談支援事業は福祉にかかわる制度や法律やサービスの隙間を埋めることが仕事です。

言い換えれば制度や法

律やサービスには必ずここまでという決まりがあります。人の生活は連綿としたつながりの中にあるので、役割や決まりで支援をするとどこかに必ず隙間ができてしまいます。そこを埋めるのが相談支援なのです。このように書くと、読まれた人はなんとなくわかったような気がするかもしれませんが、実はそれはとても難しいことなのです。役割の隙間というのは、実は誰もやろうとしないから隙間ができる訳で、「隙間を埋めるのが仕事です」と公言するのはたいへん勇気の要ることです。なぜなら、簡単にできることなら、隙間はすぐに埋まるはずであるから、隙間が有るということは、難しくて簡単には埋められない仕事であるからです。

想像してみてください。貴方は川に流され溺れかけている人を発見しました。しかし貴方は、泳ぐことができない。どうするか? 「泳ぐことができない貴方」が相談支援事業の相談員の置かれた立場です。相談員は人を呼び、道具を集め、何とかして溺れかけている人を救おうとします。これが、タテ・ヨコ・ナナメのネットワークです。この時に、助けに駆けつけた人の仕事や役割を知り、法制度という道具の使い方を知ったうえで役割分担しなければ、溺れかけている人を助けることはできません。これが連携ということなのです。

連携はバトンタッチではなく、Hand In Handの関係を生み出すことです。待っていたり、相手のことがわからないところでは連携は生まれません。連携していくには相手の仕事を理解することが必要です。お互いの立場や持っている力を知り、役割を分担することは援助を必要とする人を

助けるためだけではなく、支援者がお互いを助けあう事なのです。課題を解決しようとして話し合うのではなく、解決できないから話し合うという姿勢が必要です。「解決できない」課題があるということ、多くの関係機関が確認する作業から次のステップへ・・・一步前へ、10センチでも1センチでも前に進み「役割を超えること」で仕組みを作ることに繋げなければなりません。

溺れている人を助けただけでは、隙間を直さない限り、何度でも川に落ちてしまう人が現れます。溺れている人を助けたならば、繰り返されないために、溺れないための手立てを考えなければなりません。少なくとも、そこに隙間があること、助ける手立てが必要なことを公に伝えていかなければなりません。このために地域自立支援協議会があると思います。

平成18年の障害者自立支援法の施行によって、日本各地に地域自立支援協議会が生まれました。地域自立支援協議会には当初から地域の課題を次々に解決し、福祉資源を増やしていくのではないかと大きな期待が寄せられました。残念ながら、その期待に応えるだけの力は今までの地域自立支援協議会には無かったように思えます。しかし、「それでも・・・」と私は考えています。障がいのあるご本人やご家族がどんな事に困っているのか、支援のための課題がそこにあることを明確にして地域に向けて発信する役割を地域自立支援協議会は担ってきたと思うのです。

今まで、誰かが助けてきたから、何も無かったようになってきた事が、地域自立支援協議会という場で取り上げられることで、見えるようになったのではないかと。私は性善説に立つので「障がいのある人が地域で生きていくのに、このような困難な課題がある」とわかれば、「ほっとけない!」と誰かがきっと助けてくれると信じています。連携することで一步前に踏み出すような、地域自立支援協議会はそういう場になってほしいと思います。相談支援事業に携わり地域自立支援協議会にかかわる者の願いです。

社会福祉法人愛光園 理事長 日高 幸子
ひかりのさとの会 会長 皿井 寿子

第6回 社会福祉法人愛光園 実践発表会 のご案内

多くの皆様からの日頃のご支援に感謝を込めて、今年度も実践発表会を開催させていただきます。
私たちが法人の基本理念として掲げている、地域の輪の中で「共に生きる」実践と運動が、日々の取り組みの中でどれだけ追求できているのか、この実践発表会を通して自ら検証すると同時に多くの方のご意見を伺い、参考にさせていただきたいと考えております。

今回はメインテーマ「地域と～連携・交流・支援～」を縦糸に、各事業所の最近の状況や取組を演題としてまとめたものを横糸としてお伝えしていきます。

第6回目となります社会福祉法人愛光園の実践発表会ですが、今年度は知多市勤労文化会館「やまももホール」にて午後からの開催となります。

日時・場所等お間違えなく、多数のご参加をお待ちしております。

記

日時：2011年2月12日(土) 13:00～16:00

場所：〒478-0047 愛知県知多市緑町5-1 (TEL 0562-33-3600)

知多市勤労文化会館 やまももホール 定員240名 (参加費無料)

主催：社会福祉法人愛光園、ひかりのさとの会

参加申込：別紙参加申込書に記入し、1月31日(月)までにFAXにてお申し込みください。(FAX:0562-83-4344)

発表会の概要

第6回 社会福祉法人 愛光園 実践発表会

メインテーマ 『地域と～連携・交流・支援～』

実践発表 以下のグループ(事業所)から9題

- ひかりのさとのぞみの家
- ひかりのさとファーム
- 介護老人保健施設相生
- 障がい者活動センター愛光園
- ワーク
- まどか
- 大府市発達支援センターおひさま
- 地域居住サポートセンター
- 認知症グループホームもくせいの家

まとめと講評

- 上田 晴男 氏(当法人スーパーバイザー)

展示

- 各グループ、事業所の日常を紹介するパネル
- 利用者の皆様による作品、商品等



※ 事前に詳細を知りたい場合は、各事業所にお問い合わせください。

第1回QCサークル法人内発表会

総務部 有田智史



去る2010年12月13日(月)に、法人として初めてとなる「第1回QCサークル法人内発表会」がデイサービスセンターこぶしを会場にして行われました。当日は18時

～20時と遅めの時間設定のうえ雨模様だったにも関わらず、77人の職員の皆さんの出席がありました。発表サークルは全6サークル。10月に事業所内での発表会を勝ち抜き、11月～12月にかけて行われた事業所内での発表会も勝ち抜いてきた各事業部の代表サークルです。かっぱサークル(おひさま)、YMCAサークル(まどか)、TTB25サークル(高齢事業部)、1358サークル(ファーム)、Accessサークル(総務)、縁・JOY・クラブサークル(高齢事業部)の順番で、これまで取り組んできた成果を8分間に濃縮しての発表でした。いずれの発表も、各事業所での問題点をQCストーリーに落としこみ、マニュアル化するなど標準化を図り改善に結びつけた素晴らしい発表でした。結果は、ひかりのさとファームの1358サークルが金賞、総務部のAccessサークルが銀賞を受賞しました。



まだまだレベルアップしていく為にも「QC手法を効果的に使えるようにする」「QCへの理解や技法を身に付けていく」などの課題がみえました。今後は、出席者のアンケート結果でも意見の多かったQC手法に関する勉強会などを企画していきたいと考えています。アンケートでは会場設営に関することや配布資料のことなど、たくさんの貴重なご意見をいただきました。しっかりと記録として残し、次回の発表会に活用させていただきます。私自身にもいえますが、発表会を終えてホッとする気持ちもあるかと思います。しかしこれを一つの通過点ととらえ、発表会を通して普段はあまり見ることのない他事業所の問題点や取り組みに触れて感じた事を今後の活動に繋げていただけたらと思います。今後は福祉QC全国大会への出場を目指し、継続したサークル活動が続けられるような仕組みの整備も併せて行っていきます。



最後になりましたが、発表会の運営にあたり、拙い司会進行にも関わらず最後までお付き合くださった出席者の方々や、準備の段階では多くの方々のご協力により今回の発表会を無事に終えることができました。心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

ひかりのさと案内図

JR東海道線大府駅下車、タクシー(15分)が便利です

